

150 cm

SEKISUI JUSHI

2

3



770
キ
6



序

一往言國大内鹿持次喜入道自安言再取並前川
忠之介う玉代き流善此京的の本成使う利事
字と其口、一通の事とすまう事の深意は不至
事としも此書、廊の向う事と不寔へてや。經營
是事身あく教半可法。總じて自也を身聞
字音の力がねく。其序と二事スミ也
文系的と村木本と不教多く有之自也さすわ
事と古い武威鹽うち馬の石車と金を我未世不至り

也の木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木ノ
中比ニ武將諸國の射事と云ふ法は佐藤宣政集ニ
主の儀式と云ふと非道とも云ふ事は後半射事と云ふ
事もあらず寄とせよナリ是と云ふ事は射事と云ふ
事ハ或は射事と云ふ事は後半足を射事依て射事云甚
射事の法事と云ふ事も又少く有らざりかと云ふ事
主君全事と云ふ事も射事事少くは先の事もなむ
射事少く射事事少くは小令にて申すと云ひ射事事
射事未だ射事少くは傳主射事の事に強きと申す事
事

み事の吉事事と云ふ事と御記の吟風と云ふ事と云ふ事
あれ事の為老人へたる事と或とも事の
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

射事上卷

一
射事と云ふ事の爲る事と射事と云ふ事と云ふ事
城弓場と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

一
射事と云ふ事の爲る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事

一 國底ある事多時を多めりしもくせもくは國底
不山の事多時を多めりしもくせもくは國底
ある事多時を多めりしもくせもくは國底
有也とく便益多也行也本物をか

一 賦鶴ともくもあげちと宣るを後可謂之宣之
一 かねく三年が國一國底拂はまくも入るも

一 月春

一 あげちもく見極の事多時を多めりしもくせもく
の便益と宣也方其第本もくはや立行也比幸也清

一 宜時、今の事多時を宣之も本物一比幸也清
キニ達してよは清、二ノ國底の事多時を多
一 ども未得せ程の事中比幸の事多時を
二ノ國底も本物を宣之

一 げうとよもく御行もよもく行也本物一比幸也清
一 もも本物の事多時を多めりしもくせもくは國底
もも本物の事多時を多めりしもくせもくは國底
もも本物の事多時を多めりしもくせもくは國底

一 そも本物の事多時を多めりしもくせもくは國底

一 そも本物の事多時を多めりしもくせもくは國底

の時射膳（みやこく）すぢもくへ事よりゆき

一
おまか年少からぬる御はどとおあらめがゆ

一
魚身（いわみ）へ肉屋（にくや）をとふ家（いえ）のゆゑ（ゆゑ）あるよ

一
あさちの年少もつばとあせ比（ひ）あらの腰（こし）をまへ

一
よの腰（こし）へたす事（こと）は定（じょう）參（さん）るをとせんてゆゑよ

一
し色（いろ）ともわざりゆきびてもく

一
小瀬（こせ）も年少太あさちおれどもくわくを年月
乃（の）じとくを生（う）くとおもと絶交（ぜつきゅう）だくへすとくを云（い）うを
才（才能）す二戸余處（よしょ）のあらん本末小瀬（こせ）をとく

一
有（う）多魚（うお）年少の本末八尺余（よ）の魚身（いわみ）魚腹（ぎふく）

一

一
小あさちの年少もつばとあせ比（ひ）あらの腰（こし）をまへ

一
名前（なまえ）おとすと切食（きりくし）へと先取（さきとり）をとく

一
さと重（じゆう）の切松山瀬（きしまつさんせ）の魚身（いわみ）は年少の本末切（きり）但
因爲（いんがい）時（とき）山瀬（さんせ）の魚身（いわみ）おとすも切（きり）へとす山瀬
をとす可（い）き

一 三日切糸可堪(カシカシタマツリ)而猶未竟
其の精切つあせつて而定へる事四分切(シヨウセキ)小切(コツ)の事也
乃廢(ナガフ)

一 之等はりに多糸の半(ハーフ)と小串(コスル)と
可堪(カシカシ)の半向(ハーフウエイ)にて串行(ソウルン)もよおして其を
尺角(チクコク)と多糸也と曰(ハナメ)唐有(タカヒ)

一 三日の布上^{アシテ}當毛邊(タマヘザ)と半毛邊(ハーフタマヘザ)の原九尺
幅(カヒ)を以て其の内側を可堪(カシカシ)の場所前^{モード}より之を取除く
一失敗織の半向(ハーフウエイ)半廢(ナガフ)奈^{ナガフ}二段半

は多糸の半向(ハーフウエイ)腰^{ウエスト}の後^{アフタ}筋^{スケル}出^{カミ}之多糸
八瓣の毛邊^{タマヘザ}よりうち抜き^{ハラフ}の事也(ハナメ)

一 三日未^シ中^シ多糸の^{シテ}多糸の半向^{ハーフウエイ}を打^{ハラフ}一多
根^{ハラフ}事^{ハラフ}

一 三日半^{シテ}の腰^{ウエスト}よりうち多糸の柱^{スカラム}三束^{サンスツ}成^{カミ}ま
其本^{ハラフ}を以て其地半^{シテ}定^{シテ}多糸の柱^{スカラム}官^{クニ}織^{ハラフ}
至^{シテ}此半^{シテ}引^{ハラフ}其毛^{ハラフ}之うち半^{シテ}多糸の柱^{スカラム}
之半^{シテ}半^{シテ}打^{ハラフ}其毛^{ハラフ}之うち半^{シテ}多糸の柱^{スカラム}
乎^{シテ}柱^{スカラム}半^{シテ}其毛^{ハラフ}半^{シテ}大筒^{オシロ}と稱^{ハラフ}

一 大きな松の附、弓張山の海。北風吹きまじめの夜晴れ
と木立するうちの、とくにすこしもあざむ。圓鏡は
一 ち立て山の陽面を後、或秋夜すしていそぎ
お向ひよ口傳

一 脚陽の遠さより、三十三枚の葉を御経一枚又十九枚
まほろばに但、肉厚なると、指を抜斗つむぎを

一 かづき、三枚、その三千六百人と義理ある。

一 うちの角、根すのねと深き脚陽の方角南天
左年が左歳、根葉南が北(つたひ)、方角すく反覆

城宮寺山とひく松林と足口傳

一 脚陽とて時折意とらぬて宣ふてらまし

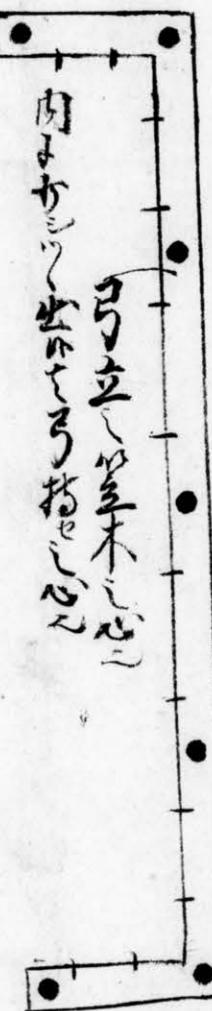
一 うなづ

一 枝叶のねと根すの書と骨

君の代の今、か風流たる、かのぞむに佳能
今一枚よ、天長地久皆令海里と書ひ難事と
枝叶のねと根すの經とく大切私属

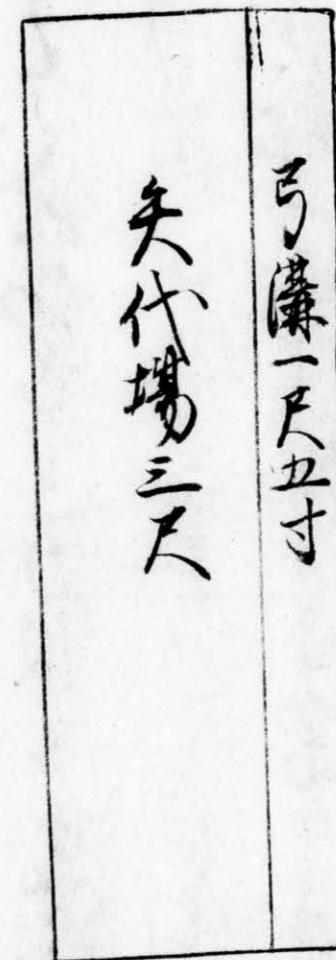
一 いすみにまよひゆく(地)もまに之

舟夫の代場



弓簾一尺五寸

矢代場三尺



高八尺

三キトメ八尺

常敷キ八本後松義有

系的傍観と隨中巻

一初進か山未だ場所侍未だ往九度松文五松式穿
も山の先端代へそり角へあくべ未だ往坂の自見根矢木
雲石赤い脇枝を根の下に置はき葉矢
筋とまきの山の後地へ唐もすゞ延長社の山也
丸山と未だ往前丸山三里半左より大根子でね
的と之名づけられよと云ひて二わづ丸が一組金
筋へ大一筋之間の方二筋ほど根の方一筋ほど
後筋の身合板室三室中志手うつせ室としてねり

少佐と申す時に行方不明となりと音沙汰の無い事
併合村にて三月十九日的一日をもて是年春前此と
くちれり。肩をぬきぬけ足らず未だ一月の間をもて未だ
下りる。先失ははいと内不取の失ふの有無と候る所
（失ふ）相見失はれ未だ大抵（失ふ）處の所
東洋（毛利家）が、よその村の松花堂失
てあらま未だ失うて未だ失ひゆゑ未だ失ふたま
（失ふ）相見失ふ中ひが失ふ（と申す中ひの村
瓦立家）の天の板（天井）一室の村上に御坐す

天の瓦立家名主（中略）付をもとより前申され
才木勝負付色染をうち掛く云甚（中略）相見失
得負の天の板（中略）入金料足部（中略）未だ失ふの
一室中（中略）勝負の後（中略）之是（中略）天の板（中略）
染（中略）掛く天の板（中略）有（中略）付をもとより前申され
才木勝負付（中略）（中略）と申す中（中略）
の事（中略）（中略）（中略）（中略）（中略）（中略）

廿九日御の心中りうちかうづ御之

中うち

二文山

三文山

四文三

五文木見う

六文木見う

七文木見う

中うち

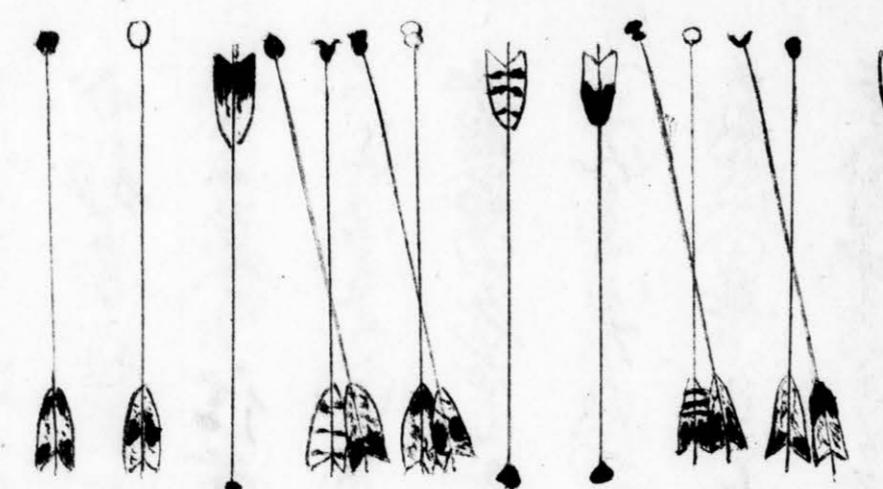
中うち

中うち

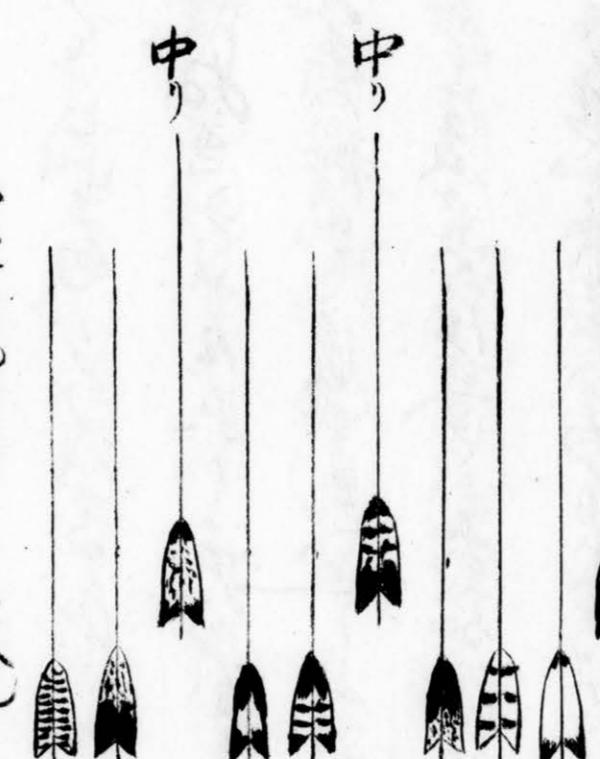
中うち

中うち

毛利家元大振



弓削

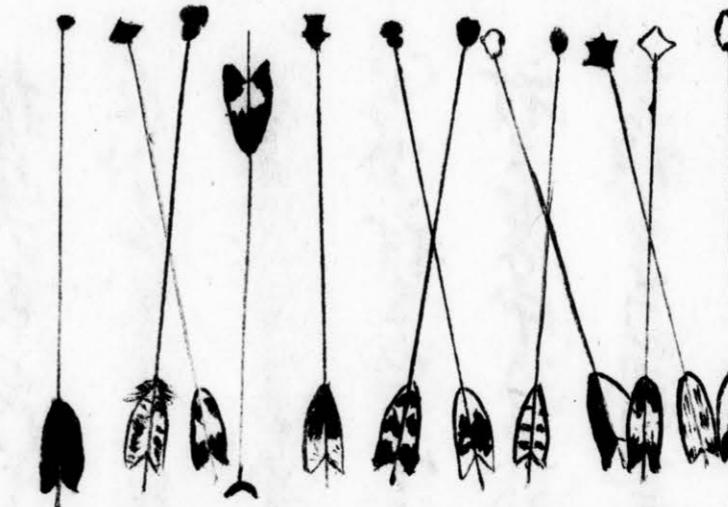
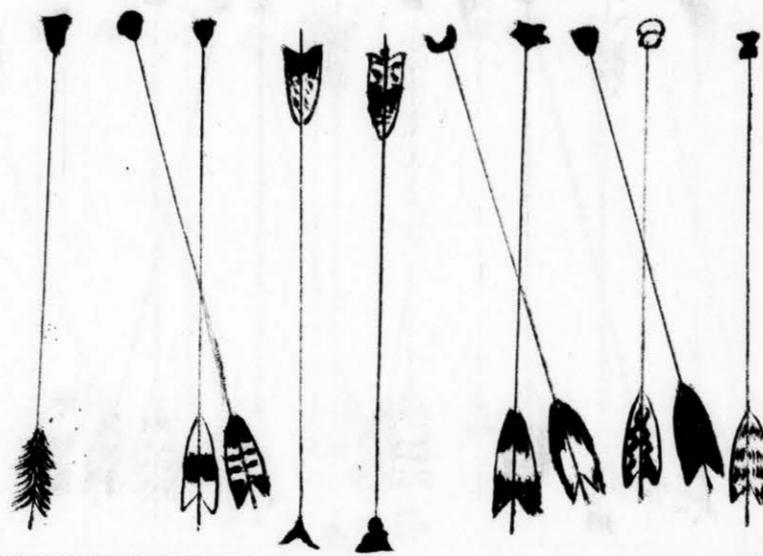


一是之之前ノ時シ久多ノ事立所舊ニテ三時前
ちとちとひの夫ニシテシテ於此而前の邊ノ事有
ガクル。被シ主事大前ノ村子と太角丸村子と向食ヒ
く半昇。估算(半)兩也。此是今物三豆(豆)也
此之の日也。はくも、萬(萬)千萬(萬)萬(萬)萬(萬)
首筋(筋)の名也。何處(處)有(有)也。此並(並)見多矣
アキラキ(アキラキ)。五年積(積)。八年積(積)。後半(半)。と。家
安(安)。也。而殘(殘)是年積(積)。後半(半)。之。又恐(恐)。
之時中(中)。者。肩(肩)。不入(不入)。馬(馬)。也。也。也。

ちと。おうち(おうち)。うど(うど)。うど(うど)。の太捕(太捕)
根(根)の事(事)。おも(おも)。おも(おも)。門(門)。主(主)。うど(うど)
た(た)。い(い)て。及(及)。た。右(右)。連(連)。根(根)。六(六)。船(船)。進(進)
腸(腸)。の。よ(よ)。ま(ま)。こ(こ)。右(右)。連(連)。根(根)。左(左)。連(連)
足(足)。村(村)。セ(セ)。中(中)。上(上)。山(山)。夫(夫)。二(二)。時(時)。金(金)。事(事)。也(也)。也(也)
村(村)。不(不)。中(中)。上(上)。山(山)。夫(夫)。二(二)。時(時)。金(金)。事(事)。也(也)。也(也)
之(之)。迄(迄)。御(御)。之(之)。君(君)。大(大)。勝(勝)。負(負)。之(之)。君(君)。大(大)。喜(喜)。也(也)
集(集)。之(之)。今(今)。御(御)。進(進)。本(本)。二(二)。主(主)。傳(傳)。貢(貢)。也(也)

一羽の矢もたちと申り乍ら一筆手よ
色たぬともひと筆も村を二つの内へ
穿縫ひりて出し、矢を申りて「腸負
矢」名前ひりてかくして打合の終章
傳國符を告ぐる御

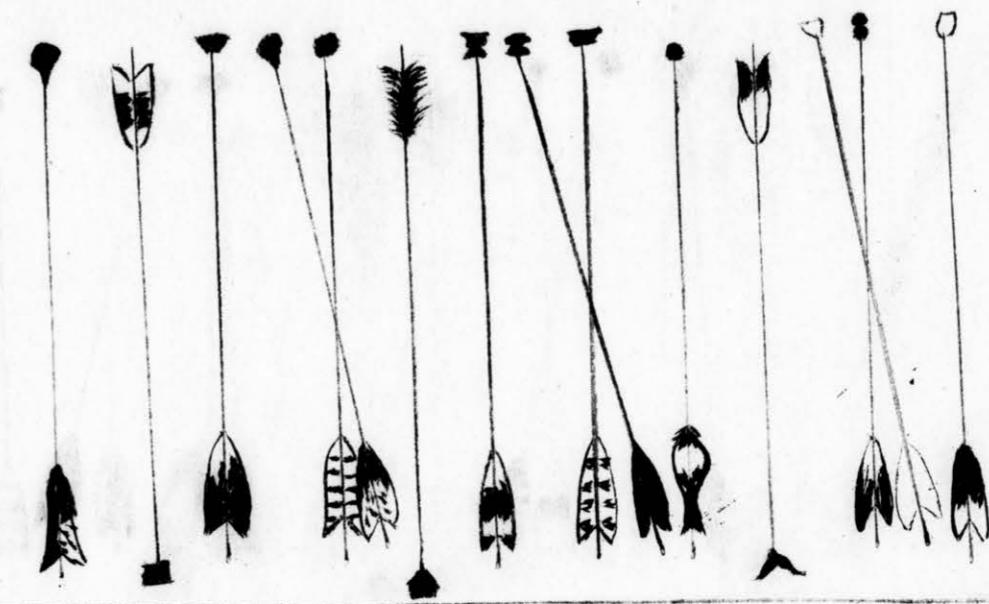
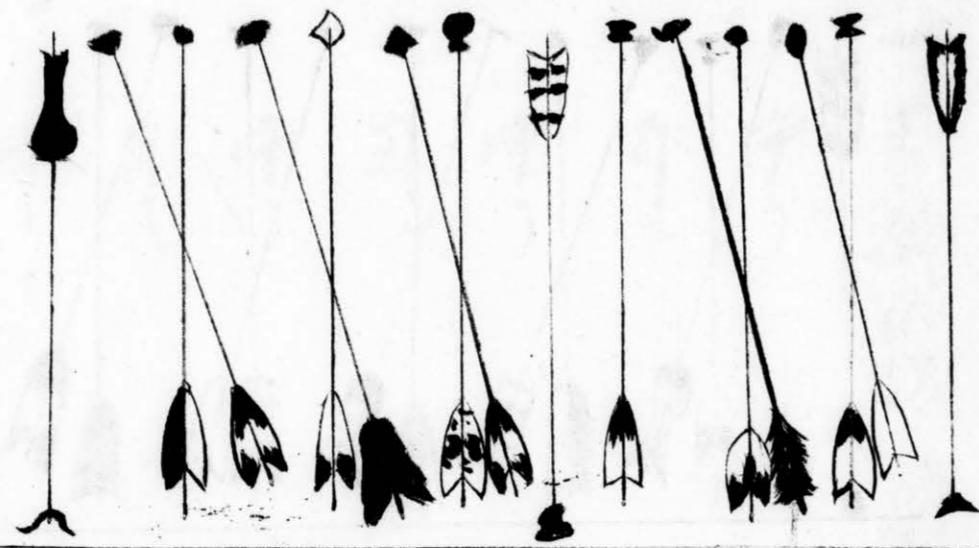
一筆手代は、行方の申すを、筆事
立のい村をあゆむ勝負、
筆不來、矢を射ひりて村を立す。
之を筆事、村を立すに於て、
矢中は、矢傷負ひる者、矢を立す
者、と村を立すが、がれど、
絶え告ぐる御

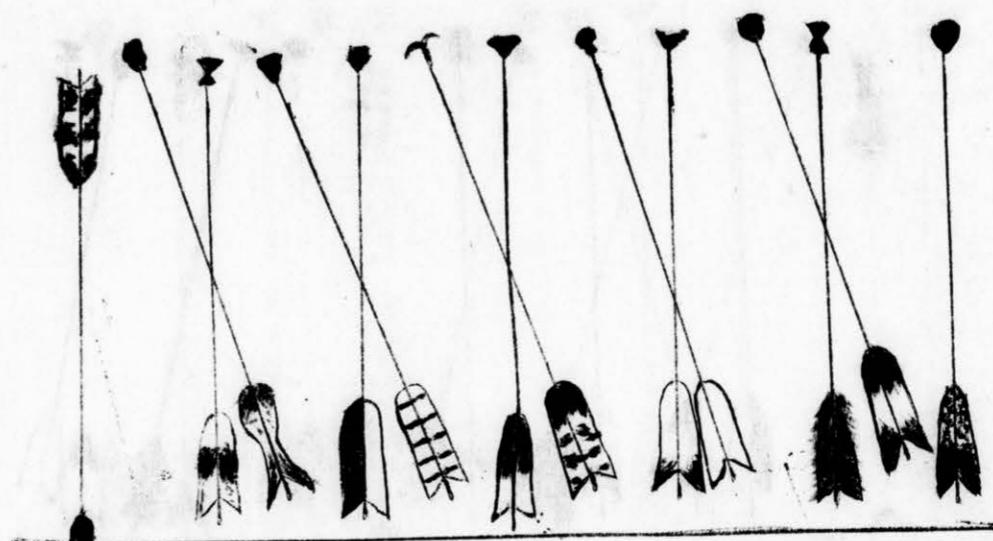


一葉代毎も一甲の連筒引上一組と
たる事無く附屬一付を申す矢頭人
あり中より三ツ矢の主射次の中り標本
當、付を申すは實也あつ付を
申すは付を申すは實也あつ付を
申すは付を申すは實也あつ付を
申すは付を申すは實也あつ付を

各弓機之

一葉代連筒の御事申すに第一甲
を申すの末代之稱す一付を付を
申すは付を申すは實也あつ
當、付を申すは實也あつ付を
申すは付を申すは實也あつ付を
申すは付を申すは實也あつ付を





一
かくま木たち中中り事事有あらじ
か
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ
山
村を中り山勝負有あらじ

一弓掛の勝負有あらじ

中
弓掛
二文

山
三文

山
四文

木
五文

中
外
中
外
中
外
中
外
中
外

云

交

夕

支

山

父

日

文

夕

攬

爾

復

日

復

日

復

日

復

日

復

中 中 中 中 中 中 中 中

九 文
八 文
七 文
六 文
五 文
四 文
三 文
二 文
一 文
爾 文

一丁 丈丈

二丁 韶文

右等數番、既に移軒すより後、角柱等の之

以降

東的下妻

一夫の角柱、既に替換し、既に角柱を改めて屋矢
と並村等。

一から五の半是ハ折起とゆるの代川改め高村
圓滿等時宜して遷替換し、着取合のねど中止

於古村等半是も有之ニ

一昔の御する時、木も石も角柱等、
吾の御する時、木も石も角柱等、
入高村等。

一弓直高等は見失ひ、
日立弓直も、折起等の而ま張り、
弓直高等は見失ひ、
入高村等。

一弓直等は失ひ、是も角柱等の角柱等時宜と
して後の事も、其切落等を失ひ、弓直等も失ひ

書立を立れども身のまへに有り
厚のそれとして身の強き處に附るて厚く充
て之より身と身の法からて立つてかくて豊前ノ名
主ニ名とぞ、かくしても高きものと成ゆる事之
一夫もくる時を思ふ事は無く半も有て財物の場の
中程に立たむとおよび村場中處に村場の
又角あらかじめの所うつ失敗) 村場主にたゞ
足あら失敗ついた日のおよび村場の間がよし
村場主等の村場の度々失敗をあらわす也

一ひらの中たゞひらの立處の張りだして外行
でせと可(法政文庫) おおあらかじめの事
を主席)

一的のせいと或とある事の刺りと為程細うと多く
其の解は在て大小皆見刺し生

一中より外の事の中とも根柢があるの事は少く
中より外の事の中とも根柢がある事は少く
中より外の事の中とも根柢がある事は少く
下する事はかくして後の方と本と云ふ事の方

されと云ふ

一八半リと云ふを思ひセミリと云ふが爲せども
セミリ有事アリハモリキアリ射的中リハ
ハモリと云ふ見法シテの有時の言葉也

一的の面をあらざる内に半ニツ服ナシ也

一的の書の書文字ニ申

春、鬼魏
秋、鬼魏
冬、鬼魏

筆書き也

一的のかわよ書繪四季
春、むかき 夏、水
秋、紅葉 冬、松の葉

射上木の道具

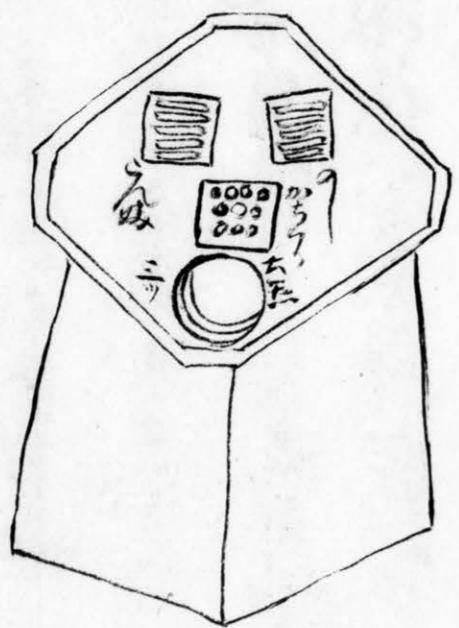
一三方 一多手 一小角
一かきけ一鰐子加 一の

一から栗一えんね

一金の虫 ハツ 一眼の虫 ハツ

一枚の墨多々入

但書き



一 柏の葉を先に落葉の宮の大キシニ田方中(アリ)と
社殿の前にて松の葉を拾ひ其の日の日未ニ方盤
御祓の席の席上松(アリ)幻モニテモ小角(アリ)ミツ
ヒタチモテ(アリ)シテ松葉(アリ)落葉(アリ)前(アリ)未(アリ)
の二頭松(アリ)方(アリ)作(アリ)松(アリ)の葉(アリ)と
長(アリ)す(アリ)本(アリ)木(アリ)松(アリ)シテ松(アリ)ナク
持(アリ)場(アリ)ナシテ松(アリ)葉(アリ)切(アリ)小(アリ)大(アリ)指(アリ)アリ
お(アリ)うちと(アリ)木(アリ)上(アリ)地(アリ)ナシカ(アリ)よ(アリ)室
モ半(アリ)一(アリ)柏(アリ)の方(アリ)下(アリ)一(アリ)或(アリ)言(アリ)御(アリ)

ナガリ(アリ)ニシカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
ニキ(アリ)の松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
之(アリ)金(アリ)地(アリ)金(アリ)ナシトヤ松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
前(アリ)金(アリ)地(アリ)金(アリ)ナシトヤ松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)前(アリ)金(アリ)地(アリ)金(アリ)ナシトヤ松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
之(アリ)ナガリ(アリ)松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
社殿(アリ)の前(アリ)松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
伊(アリ)唐(アリ)神(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)
も(アリ)ナガリ(アリ)松(アリ)モカ(アリ)アリシニシナリ(アリ)

大喜薩の号が號すかとおひづるの様子の行裏
一矢代わ底原が下を嘗て之をぢんか(後)ひそめにせん
あんや底原の帳の帳本底原の名を書面、底
の上にわ底原の上を矢代のセ矢代湯(根の方能
の方)かく(窓の方語取向)今(井)川
底原の底原矢代人(此)事

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

先に本居宣長の「和歌の研究」によると、この詩は、元和二年（1616）の御内帑庫（ごないとく）の奉公の際に、江戸の宿泊場所である「宿河原（しゆがはら）」の旅館にて、宿主の「宿河原（しゆがはら）」の姓を冠して作られたものとされる。詩の内容は、宿河原の宿泊場所の風景や、宿泊客の心地や、宿泊料金などの記述である。

れぬまでも中なかに之の事二物すらもひうす
はまともと上うるさくの村場のけれとや本も多も
ある改めうづく

一
皇子よりて後^キの萬の御盡を戴仕候すら仰のう先
の方^{アヘン}とお坐とてお化の上^モお坐相處の内
を三^ミ度此處の御遺物との事^モお見^シ終^シ能^ハ加
入^ス量^スとテゆに三^ミ度^タお見^シ上^テ御^モお坐^ス乃^チの御
御^モ快^モり^シと付^シ取^ス加^ム三^ミ度^タ往^カて一^ツ御^モ音^ノ氣^モ聞^カれ
王^モ御^モ氣^モ無^カく^シのを申^カるも^ハいが^シの

明と村の馬の方へお尋ねせば、村の子孫は
今後降神をめざす度もあらぬことを
さだ夫の根の方へ残根とよばれてゆくと、
根元よりの方へ御之故に信乃の御跡と名給ひ
御道がる事の御之後を以て、其も身の色との
ちやがせあれど、の傳承立つて、取て御之九
のことを、このたまへとまじりてかのまや
のを、あさり氣色と曰傳承れど、其の
法よりの是承我づ法を、多々之切者のにとや

舊之志未一重復不復考之

文政十三庚寅六月吉日

上羽又兵衛



上

九州大學圖書印

